

二〇一九年度

A

国語 (1)

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

鈴は中学一年生、弟の圭は小学二年生である。四年前、お父さんとお母さんが別々に暮らすことになり、鈴はお父さんと駅前のマンション、圭はお母さんと隣の県にある町（福山）に引越した。福山はお母さんの生まれた町で、おばあちゃんも近くに住んでいる。しかし、お母さんが突然亡くなってしまう、圭はお父さんと鈴と一緒に暮らすことになった。三人で暮らし始めてからも、圭は週末、度々福山のおばあちゃんの家に行っていた。鈴は、圭とお母さんが四年間暮らしていた町に行ってみようと、圭と一緒に福山に行き、お母さんの高校の同級生の野元さんの家に行く。

「鈴ちゃん」と、野元さんはあらたまった声で言った。思わず野元さんを見た。

「鈴ちゃんのお母さんってすてきな人だったのよ」

どきん、と胸が鳴った。急に胸の中から何かがあふれそうになった。

わたしはお母さんを守りたいと思っていたんじゃないなかったけ、と思った。お母さんが高い熱が出て寝こんだとき。わたしは、眠ってしまったお母さんの鼻に顔を近づけて、お母さんが息をしているかどうか、何度も確かめた。お母さんをぜったい守ろう、とあのときわたしは心に決めたのだ。なのに、わたしは守れなかった。

涙がこぼれないようにまばたきをくり返して、いそいで残りのケーキを食べた。

顔をあげると、圭はもうケーキを食べ終えていて、顔を横にむけてテレビを見ていた。

圭がぱつとわたしのほうをむいた。

「ダイオウイカってどれくらいの大きさ？」ときいた。

「知らない」と答えると、ふーん、とまたテレビのほうをむいた。

◇ ◇

おばあちゃんは香辛料の効いたスペアリブを焼いてくれた。オープンでスペアリブを焼いているあいだに、きゅうりもみを作り、豚汁とドライカレーも作ってくれた。

おばあちゃんが暮らしているこの小さな家は、おじいちゃんが亡くなる数年まえに買ったものだ、とお父さんは言っていた。それまで長年住んでいた借家を急に明け渡すことになり、たま

【注意】答えはすべて解答用紙に書きなさい。

たま近所に売りに出されていた家があったので買うことにしたのだ、と。ということは、以前住んでいた家がお母さんの育った家で、この家ではお母さんはほとんど暮らしてはいない。

きょうこの家に入ってきて下駄箱の上の羊の絵を見たとき、小さかったときに赤ちゃんだった圭と、両親につれられてこの家に来たことがあった、と思いだした。

でも泊まりはしなかった。ちよつとだけいて、それからどこかへみんなで出かけたのだ。おじいちゃんもいっしょだった。とても太っていたおじいちゃんは扇子を持ち歩いて、始終顔をあおいでいた。

四年まえに福山にもどつてからは、お母さんは圭をつれて何度この家に来たはずだった。わたしは部屋の中を見まわした。でも、どこにも①お母さんの残した印のようなものは見つからなかった。

「おばあちゃん」とわたしは言った。

「なあに」

「八百屋のお仕事って大変なの？」

「大変じゃないわよ。もう二十年近く塚本で働いてきたんだから。塚本の仕事があつてよかったって、このごろ思うの。おじいちゃんがあんなに早くに死んじゃうなんて思わなかったから。仕事があつて助かるつてことがあるんだなって。それに、このたびも」と、そこでおばあちゃんは言葉を切った。

おばあちゃんはスペアリブをかじりはじめた。おばあちゃんの髪はお葬式のときには栗色だったのに、いまは頭の上のほうは白髪になっている。白髪を染めるのをやめたのだろうか。

「おばあちゃんはどこにも悪いところはないんでしょう。元気なんだよね」

②「元気？」と、おばあちゃんは初めてきく言葉のようにくり返した。眉毛をあげて「まあ、そういう言い方になるかもね。どんな言い方でもいいの。やらなきゃなんないことをやってるだけ」と言った。

圭はわたしとおばあちゃんの会話には入ってこないで、まずドライカレーを食べ終え、つぎにスペアリブにとりかかっていた。圭は噛みついた肉を骨から引きはがそうとしていた。

「わたしはね、小さいときに父親が死んだの。それから小さかった弟が死んで、そのあと母親も死んで、夫に死なれ、娘に死なれ、そんな人生よ」

いつかテレビで見たゴルフ場の芝生が頭に浮かんだ。手入れされた緑の芝生がどこまでも広がっていて、遠くに縁取りのようにながに見えて、芝生のほかに見えているのは空だけで、人影もなかった。

「それって、もしかしたら砂漠みたいな感じ？」と、わたしは頭の中に浮かんだ景色とは反対のことを言った。言ってしまったから、自分がひどいことを言ったことに気がついた。

「そう、砂漠よ」

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

おばあちゃんは小さく笑った。「あのね、おじいちゃんの癖ってね、話をしている『そうなんだよ、そのとおりなんだよ』って言いながら、こう、ぼん、と手を打ったの。あれがおじいちゃんだったな、と思うだすの。いろんなことは忘れちゃったけど、それだけ覚えてりやいいなって思ってる」

圭は三本目のスぺアリブを食べ終えようとしていた。

わたしはおばあちゃんの後ろに見えている流し台のステンレスの水切りかごに目をやった。お皿が二枚立っている。グラスが一個ふせてある。水切りかごのプラスチックのポケットには二本の木のスプーン。

「どう言ったらいいのかしら。あのね、悲しみが行きすぎると、半分うそになったりもするからねとおばあちゃんは言った。『わたしはあんまり悲しまないようにしているの。悲しくなりそうになると、お水を飲むことにしてるの。そしたら、胸につまりかけていたものが取れるから』

おばあちゃんはかすかに笑った。

「おばあちゃん、いま何歳だっけ？」

ほほと声をたてて、「まだ六十四歳」とおばあちゃんは言った。

「徳島におじさんもおばさんもあるし、翔太くんや美空ちゃんもいるからね」

「そうよ。夏休みにはまた、みんなで来るって」

「ごちそうさま」と圭が言った。ペーパータオルで手をふいて、それから口もぬぐった。「テレビ、見るよ」と圭は席を立った。

「体に気をつけてね」と、わたしはおばあちゃんに言った。

「はい、ありがとう」

「お茶碗はわたしが洗うね」

「だめだめ。お客さんだから、鈴ちゃんと圭ちゃんは。テレビを見て」

おばあちゃんがテーブルをかたづけはじめたので、わたしはテレビのある畳の部屋に移った。

テレビはついてはいたけれど、その前に圭はいなかった。

圭は隣の暗い部屋にいた。③こちらに背をむけてかしまつてすわり、手元の何かをのぞきこんでいた。

そつと近づいていくと、圭は二つ折りの携帯電話を開いてその画面をのぞいていた。そこにはお母さんが写っていた。缶コーヒーを持った手を上にあげて笑っている。

わたしは圭のそばにすわった。

「これ、お母さんの携帯電話」と、圭は小さい声で言った。「まだ、あるよ」

圭は指でボタンを操作して、べつの画像を出した。

お母さんが野元さんと肩を組んで笑っている。べつの写真は圭の後ろ姿。それから桜の下でサンドイッチを食べている圭。つぎの写真は、お母さんが缶ビールを片手に黄色いスカートをふわっと広げてすわっている。

圭はつぎつぎに写真を開いてみせた。

草むらにしゃがんでいる圭と猫。神社の前でむかいあっているお母さんと猫。二匹の猫。家の中でのお母さんはテーブルにひじをついている。その前には読みかけの本があった。

④急に涙が出てきたけれど、圭に気づかれたくなくて、わたしは指で鼻をつまみ、息を止めた。

⑤「わかったでしょ。ばくとお母さんはいっしょだったんだよ」と、画面を見たまま圭は言った。ひっそりとした声だった。

圭は待ち受け画面にもどすと電源をオフにした。そして携帯電話のコードをコンセントから抜き、立ちあがって筆箱の引き出しに入れた。そこに携帯電話はしまわれていたらしかった。わたしは圭のそばを離れた。台所からは水の音がきこえていた。

トイレに入ってドアをしめた。

わたしはトイレトペーパーで涙をふいた。圭は福山に帰ってくるたびに、筆箱にしまわれているお母さんの携帯電話を取りだして、お母さんの写真を見ていたのだ。

⑥A弟は、と思った。自分の気持ちをだれにも話せなくて、話す言葉が見つからなくて、そうしろと言われたから、わたしたちと暮らし、友だちもほとんどいない学校に通っているのだ。

⑦B弟は毎日、しなきゃいけないと決められていることをしていたのだ。圭にはこじか逃げこむ場所がなかったのかもしれない。でも、これも、圭にとってはちよつとだけいる場所にはなっても、ずつといられる場所じゃない。どこにもいられなくて、だから圭は自転車走りまわっているのだろうか。地図に印をつけながら、どこかに自分が安心していられる場所をさがしていたんだろうか。

わたしは使っていないトイレの水を流して外に出た。

おばあちゃんは、わたしのと圭のと、ふとんをならべてしいてくれた。

圭はリュックから漫画本を二冊取り出し、「読むけど、いい？」ときいた。

いいよ、とわたしは言った。「新しい漫画を買えばいいのに」圭が家から持ってきた二冊はかなり傷んでいる。

「この本にあきたら買うから」と、仰向いて圭は言った。

「まだあきていないの？」

「だって、気づいていないところが見つかるもん」

「お母さんて、本を読むのが好きだったよね。どんな本を読んでいたか知ってる？」

「わからないよ」

「そうか。じゃあもう寝るね」

「うん」

わたしは目を閉じた。

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

おばあちゃんが見ているテレビの音がきこえていた。起きて、筆筒の引き出しからお母さんの携帯電話を取りだし、もう一度見てみたいと思った。でも、そんなことはできなかった。

圭がくすくすと笑った。圭がすごい速さでページを繰る音がきこえる。何十回も読んでいる漫画なのだから、話の筋は完全に頭に入っているのだろう。こういう場面があつて、そのつぎに変なやつが出てきて、会話があつて、そのつぎのページが山で、笑える、というふうに、⑦ぜんぶわかつている筋をたどつていくのは安心して物語に浸っていきけるのかもしれない。

圭はばさつと漫画を枕元に置いた。あつという間に一冊読み終えたのだ。つぎの一冊を手に取り、表紙をめくる音がする。

目がさめると、部屋は暗かった。隣の部屋もしずまっていた。おばあちゃんも眠つたのだ。圭の寝息がきこえる。

家は夜にすつぱりと包まれていた。

目をあけていると、闇が戸の隙間からじわじわとにじむように部屋に入りこんでいるような気がした。何の音もしなかった。闇が音も飲みこんでしまったような気がした。目が冴えてきた。

野元さんがお母さんについて話したことは、わたしの知らないことだった。⑧そうだったのか、お母さんで、そういう人だったのか、と思おうとすると、暗いところ足をつっこむみたいな気持ちになった。お母さんは、わたしの知らない長い長い時間を生きて、だれにも話さなかったたくさんのことを胸にしまったまま亡くなったんだということが、すうと体に染み入るようにわかった。

わたしはまばたきをした。空中に何かが漂っているような気がした。

部屋の大きさが寝るまえより広がっているような気がした。部屋の一部が溶けてあいまいになっているような気がしたけれど、そっちには目をむけないようにした。隣の部屋で寝ているのが、おばあちゃんではなくてお母さんだったらしいのに、と思つた。

部屋は少し広がり、それから少しちぢんだ。部屋がぐるぐると動きだすような予感がした。いまに大きい音がして、がたんと大ゆれするような気がした。⑨自分がばらばらになってしまひそうだった。

わたしは、はっは、と息をした。

はっは、はっは。はあはあ。はあはあは。

わたしは両手で肌ぶとんをぎゅつとつかみ、目をかたく閉じた。息を止めた。がまんできなくなるまで息を止めて、それから吐きだした。脈の音がわくわくときこえた。

わたしは目を開いた。

それから寝ている圭を見た。圭は上向いて寝ていた。くちびるを少しあけて、規則正しい呼吸をしていた。

お母さんが亡くなったあと、この家で暮らしていた圭に、わたしは一度も電話をしなかった。それまでも電話で圭と話したことはなかったから、気軽に電話でできなかった、というのもあるけれど、⑩わたしは、圭はどこか高い木の上に登っている気がしていた。おーい、と下から呼んでも声が届かないくらいに高い木のでっぺんにいて、どこか遠くの空のほうを見ているような気がしていた。下にいるわたしには気づかず、雲をながめているような気がしていた。わたしのそばでもなく、お母さんのそばでもない場所に圭はいて、わたしからは見えないものを見ているような、そんな気がしていた。

体の上をすうと冷たい空気が流れた。

わたしは肌ぶとんをはねのけ、ふとんの上に起きあがった。それから立ちあがって、ガラス戸のカーテンをそつとあけた。ガラス戸も音をたてないようにあけた。足音をしのばせて縁側に出て、サンダルをはいて庭におりた。

外の空気は乾いてひんやりしていた。闇夜ではなかった。星が見えていた。月も出ている。小さな庭に植えられた木や草花の葉が白く光っていた。空気が透きとおっていた。わたしは深く息を吸った。雲がゆっくりと動いていくのがわかった。首を大きく動かして空全体を見渡した。

空はどこまでもどこまでも果てしなく広がっていた。宇宙の闇闇が広がっているんだと思った。遠い時間がどこまでもつながつている。

庭には紫陽花も植えられていた。背の高い木の根元には細長い葉をいんな向きにたわませている植物が生えていた。斑点のある茅の茂みもあった。闇の中に半分沈みながら、植物たちはひっそりとしげつていた。

わたしは大きく息を吸って、ゆっくりと長く吐いて、さっき感じていたことをもう一度確かめてみようとした。けれど、さっきまでの気持ちはもうぼやぼやとしか感じられなかった。いろんな気持ちは手の先や髪の毛の先からこぼれ落ちてしまったのかもしれない。呼吸にまじって体の中から流れでていったのかもしれない。胸のどきどきだけはまだ残っていた。

⑪植物たちとおなじように、闇が体をとかしこんでくれているような気がした。

注 塚本……店の名前。

(岩瀬成子『地図を広げて』)

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

問1 傍線①「お母さんの残した印のようなもの」とはどのようなものをいうのか、あなたが想像する具体例を出して説明しなさい。

問2 傍線②「元氣？」と、おばあちゃんは初めてきく言葉のようくり返した」のはなぜか、説明しなさい。

問3 傍線③「こちらに背をむけてかしまってすわり」とあるが、圭はなぜ「背をむけてかしまってすわ」っていたのか、説明しなさい。

問4 傍線④「急に涙が出てきたけれど」とあるが、鈴はなぜ「急に涙が出てきた」のか、説明しなさい。

問5 傍線⑤「『わかったでしょ。ぼくとお母さんはいっしょだったんだよ』と、画面を見たまま圭は言った。ひっそりとした声だった」とあるが、このときの圭の気持ちを説明しなさい。

問6 傍線⑥A「弟は、と思った」、B「弟は毎日、しなきゃいけないと決められていることをしていたのだ」とあるが、ここで鈴が圭のことを「弟」と呼んでいるのはなぜか、説明しなさい。

問7 傍線⑦「ぜんぶわかつている筋をたどっていくのは安心して物語に浸っていけるのかもしれない」とあるが、鈴は圭がどのような状況にあると感じているのか、説明しなさい。

問8 傍線⑧「そうだったのか、お母さんて、そういう人だったのか、と思おうとすると、暗いところに足を突っこむみたいな気持ちになった」とあるが、「暗いところに足を突っこむみたいな気持ち」とはどのような気持ちか、説明しなさい。

問9 傍線⑨「自分がばらばらになってしまいそうだった」とあるが、これは鈴のどのような気持ちの表われか、説明しなさい。

問10 傍線⑩「わたしは、圭はどこか高い木の上に登っている気がしていた。おーい、と下から呼んでも声が届かないくらいに高い木のてっぺんにいて、どこか遠くの空のほうを見ているような気がしていた」とあるが、ここでの鈴の気持ちを説明しなさい。

問11 傍線⑪「植物たちとおなじように、闇が体をとかしこんでくれているような気がした」とあるが、ここから鈴のどのような気持ちを読み取れるか、点線部「小さな庭に植えられた木や草花の葉が白く光っていた」「庭には紫陽花も植えられていた。背の高い木の根元には細長い葉をいろんな向きにたわませている植物が生えていた。斑点のある茅の茂みもあった。闇の中に半分沈みながら、植物たちはひっそりとしげっていた」を手がかりにして説明しなさい。

二 次の傍線のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① フクシンの友。 ② 国交をタつ。 ③ カンマツに資料をのせる。 ④ ジシヤクを使って実験する。

⑤ 努力がトロウに終わる。 ⑥ カイシユウ工事を行う。 ⑦ ソンダイな態度をとる。 ⑧ ゲキヤクには十分注意する。

⑨ 人気をハクす。 ⑩ 問題をケントウする。 ⑪ ヨウリヨウのよい人物。 ⑫ 藤原氏がゼンセイをきわめる。

⑬ コメダワラをかつぐ。 ⑭ 本のコシヨクを見つける。 ⑮ ココン東西の絵画を集める。 ⑯ 上背のある男。

⑰ 村の社に集まる。 ⑱ 酸味の効いた料理。 ⑲ 未来に光明を見いだす。 ⑳ 直に談判した。

一

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11

二

①	⑤	⑨	⑬	⑰
す				
②	⑥	⑩	⑭	⑱
つ				
③	⑦	⑪	⑮	⑲
④	⑧	⑫	⑯	⑳